

小林多喜二は1903年12月1日、農家の父・末松、母・セキの間の第三子として秋田県北秋田郡下川沿村川口に生まれ、1907年の暮れに家族で小樽に転居しました。

大月源二は1904年2月19日、海産物の仲買業を営む父・清三郎、母・マンの間の第三子として函館に生まれ、1908年に家族で小樽に転居しました。

絵画に関心を寄せる少年二人は、水彩画を通して互いの展示会を見に行くなど交流を持ち、小林多喜二は作家の道へ、大月源二は画家の道へと歩んでいきました。

のちに小林多喜二「一九二八年三月十五日」のカットを大月源二が手がけることとなり、同作はナップの機関誌『戦旗』1928年11月号、12月号に掲載されます。

1929年には『戦旗』5月号、6月号に掲載された小林多喜二「蟹工船」の挿絵を大月源二が担当し、1930年8月23日から10月31日まで都新聞に連載された長編小説『新女性気質』（のち「安子」に改題）の挿絵も大月源二が手がけています。

1931年7月、多喜二は日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の書記長となり、同年10月、日本共産党に入会しました。大月源二は同年11月に結成された日本プロレタリア文化連盟（コップ）に参加、中央協議員となり、多喜二と前後して日本共産党に入会しました。

1932年6月に治安維持法で検挙され豊多摩刑務所に投獄された大月源二は、1933年2月の小林多喜二の死を刑務所の中で知ることとなります。

小樽で出会い、それぞれの道を力強く進み、交差し、一方は道半ばで途絶えさせられた二つの人生。小樽での生活やそれぞれの活躍、周辺の人々などを遺された資料からご紹介します。



『新女性気質』予告記事（写真左：大月源二／右：小林多喜二）



『群像』創刊号 1920年



戦旗社版『蟹工船』1930年3月



『クラルテ』1924年4月



『新女性気質』第1回 切り抜き



『新女性気質』第7回 切り抜き